
天ツ君ノ歌

もりそば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天ツ君ノ歌

【Nコード】

N1302Q

【作者名】

もりそば

【あらすじ】

イチノセアキラ

一之瀬玲は失った記憶に惹かれるまま復讐する。

過去も、理由も分からなくても、ただ鬼に復讐するために彼女は存在を許されていた。

彼女は結ぶ、『最弱』の吸血鬼と鬼の盟約を。

鬼を殺すために鬼と結う。その矛盾が、自分を殺すことになるとしても、玲は笑って前へ進む。

そして、『鬼殺し』は始まった。

第一章・電光雪花・結（前書き）

『クリスマス小説の玉碎事件』から早くも二週間ほどが過ぎようとしています。なんとか新作を引っさげて帰ってくる事が出来ました。もりそばであります。

このまま伸ばし伸ばししていたら、いつの日か「茹でて食うぞ」と言われそうなので、表紙イラストと共に完成させました。何かと至らぬ点もあるかとは思いますが、よろしくお願い申し上げます m（

） m

第一章・電光雪花・結

——貴方は、求めるために人を外れることが出来ますか？

青年は人として生きることを求めるが故に。

少女は直接的な死をもたらす事を求めるが故に。

人を外れることを選んだ。

青年は自分を取り巻く全てが虚像だということを知ってしまった。
少女は普通の人間として、実像の中を当たり前のように生きていた。

青年は混沌であつた世界を壊した。

少女は普遍であつた世界を壊された。

狂つたように落ちては積もる桜の中で、青年は思い人の亡骸を抱いて。

泣きじゃくるように降り注ぐ桜の中で、少女は母の形見を握り締めて。

青年は吸血鬼に。

少女は復讐者に。

そして、それが必然であつたかのように、二人は出会った。

／／電光雪花／／

結

「足りないものを埋めるのに模倣は使えても、欠けたものには使えない。足りないならまた戻すことが出来る。欠けてしまえば戻すことはできない。」

では、残る虚ろに何を入れれば満たされる？ そんな答えなど、誰にも出せない。例え、自分の虚ろを埋めるモノを持つ者と同化したとしても、補填は難しい。

同化とはすなわち、新たな欠落を取り込むことに他ならない」

初雪色の髪をした青年は、黒レンズの丸眼鏡をかけながらそう言った。

「同化と、鬼結オニユイは違います」

少女は青年の隣に座り、着流しの裾を正しながら持っていた盆を縁側に置く。盆に置かれていた猪口を青年に渡し、その中にとっくりから日本酒を注いだ。

「ありがとう」

青年は一度猪口の中身を煽ると、旨そうに山吹色の眼を細める。そしてまた、猪口を少女に向け、少女はそこに酒を注ぐ。

「なんだっけ……ああ、そうそう。同化と鬼結の違いを私が解るのに必要不可欠なものがない。理解することなど出来ない。だとしても、理屈では分かる。感情でなく論理。君に無くて私にあるもの。全ては論理による模倣で何とかなる」

今度は一気に飲まず、少しずつ含むように酒を口に入れる。

そんな青年の様子に、紫水晶にも似た瞳を緩ませ、少女は自分の猪口に手酌した。

「論理では見えないものもありますよ」

少女の持論。それはどうなのだろう。全てロジックだけで人間性というものを補うことが出来ると、そう教わった青年に解答を見出す道筋が見えなかった。どのような方法でその結論が出たのか、是非教えてもらいたい、と青年は思った。

「多分、一生かかっても貴方が知ることは無いと思います」

「何故、と聞いても私には無意味なんだろうな」

疑問、疑問だ。それは何故、と問い直しても、少女は曖昧に微笑み、青年はの蓄積の中にある、寂しさという感情を混ぜ合わせた顔で思考をやめてしまう。

少女は歌う。誤魔化す様に、青年が知らない旋律を緩やかに、小刻みに、夜闇色の髪を揺らしながら。

響く声の中で、青年は月を見上げた。大きく肥大した、蒼い月を。隣の彼女は同様に、月を見上げながら歌う。見えなくても、青年は少女の一挙一動を感じていた。

何故泣くのだろう。少女は嗚咽を噛み殺しながら、雫をその手に落としながら、何を思いながら歌う？

聞きたくて、聞けない。泣く過程など、青年は知らないのだから。

第一章・電光雪花・起・一

布団叩きがない、洗剤がない、ダニ用のバ〇サンがない、そんなこんなでバタバタ。

人の家ではないのに、一之瀬玲イチノセアキラという名の自分は古びた日本家屋の中を行ったり来たりしていた。もちろんボクは好き好んで走り回っているのではなく、自分の家の掃除用具類を把握していない家主のために右往左往させられている。

「玲、外窓とレールの溝、雑巾がけたよ。次は？」

ぴよこぴよこと、目の前で淡い栗毛と大粒の瞳が動いている。この家主の妹、美田倉湯葉ミタクラユノハ。血色の良い肌に汗を滲ませていた。

「玄関回りと縁側掃いといってください。箒とちりとりは納屋に入っ
てすぐ右」

「オッケ」

小柄な身体とくるくる変わる表情。元氣よく掃除に走っていく湯葉の姿は清らしい。

「レイ、何かやることあるか？」

「真白」

後から声をかけられ、振り向いた先。黒のハイネックに、黒のパ
ンツルック、髪は真っ白、眼は山吹色。長身の身体は平均より少し
筋肉質。造形は悪くないのに、いつも眠たげな容貌をしている青年
がそこにはいた。三國真白ミクニマシロ、美田倉に住まう者の一人。

「そうですね、店の方に誰か来たら教えてくれますか？」

「了解」

穏やかに、黄金に似た色をした瞳が笑む。その表情と同じような
柔らかい動作で真白は家屋の店舗スペースへ入っていく。板張りの
廊下で足音一つ立たない足捌き。無意識レベルで身についた身のこ
なし。

「玲あ……助けてくれえ」

唐突に聞こえる、何処からともなく冥府からの声。
ため息一つ。取り合えず声のする方向、書庫兼倉庫へと早足で進む。

と、そこには予想内。本によるなだらかな三角錐が出来ていた。
今さっき舞い上がった埃が霧のように舞っており、思わず手で口と鼻を覆う。

「そのままくたばっててください」

この事態を起こした奴になど、一言で十分。

「虫干ししようとしたら本に潰されたんだ」

おお、噴火した。

かび臭い古書の中から、さらにかび臭そうな甚平姿の男が一人、火口から飛び出る。

「って、まだ虫干し終わってなかったんですか!」

「——ゴバツ!」

円錐の頂点に飛び出した男の頭部に、しなりを効かせた前蹴り。
古書を撒き散らしながら、書庫の端っこまで蹴り飛ばす。

激突。棚の角。どざつと降り注ぐ棚上の本達。その本達に埋まる男。濃度増す埃。合掌。

見回してみるが、どの本もまだ虫干しに出されておらず、手近な机に本が開きっぱなしで置いてある。どうやら、この男に本を任せたのは間違いだったようだ。任せて三時間ほど本を読みふけていたらしい。

「ああもう、八十冊近く読んで。その情報処理能力を整理にまわしてくださいよ」

ぶちぶち文句を言いつつも、本を拾い上げては運び出す。だからいけないのだろう。甘やかしているからこの男はいつまでもつけあがる。

そして、こんな忙しい時に限って厄介事は幾つも重なってくる。

今の大掃除もそうだが、その三時間前に飛び込んできたモノは、さらに性質が悪かった。



「密室、ですか？」

「はあ、そうなんです」

ちょうど大掃除を始めようかと準備していた時に、しょぼくれた男性は密室の謎を解いて欲しいと美田倉の門を叩いた。遊佐浩一郎ユサコウイチロウと名乗った彼は、紋付袴がここまで似合わないかと思わせる風貌の男だった。威厳の欠片すらない、小男。

レジスターでも読み込めなさそうな薄らバーコード禿げをしきりに触り、落ち着き無く店内を見回す男の挙動にイラつきながらも、聞ける情報は聞く。因みにボクは店主じゃない。

肝心の店主は依頼人に向かい合ったまま本に夢中だったりする。

「大晦日の午後九時ごろ、自室に籠ったきり出てこなくなったので、元日の昼の12時に使用人を向かわせたんです」

使用人。みやびな事だ。

「部屋から反応は無く、鍵を使って入ってみたのですが、涼はそこリョウにいませんでした。あったのは血のついた着物だけで……」

「娘さん、涼さんが自分でドアを開け、着物だけを置いて外へ出たとは考えられないのですか？」

「いえ、鍵は外から鍵で掛けるものでして、内からは開錠などできません。部屋には通気口以外の窓などありませんし……」

「はあ……はあ？」

独房みたいな部屋だなあ、と言いかけて、慌てて言葉を飲み込む。「それで、最後に見たのは誰です？ 外からしか鍵がかからないのなら掛けた人がいるでしょう？」

だが、男は視線を泳がせ、言いにくそうに口をもごつかせる。一体何を迷うのか。

「言にくいのですが」

「はい」

「最後に見たのは私なのです。けれど、誰が部屋の鍵を掛けたのか分からないのです」

「……………」

なんじゃそら。頭、痛くなってきた。

「それなら密室じゃないのでは？ 鍵を掛けた時間が分からないなら、いつでも出て行くなり、連れ出すなり可能でしょう」

「え、ええと……取り合えず家に来て調査してください。ど、どうしても密室の謎を解いて欲しいのです」

目線を逸らしたまま一枚の封筒をテーブルに置き、ずいっとこちらへ。

訝しげにその封筒を手に取り、中身を取り出して開いてみる。途端、ボクの口元は限界域まで引きつり、いつの間にか背後にいる店主は鼻息荒く。

そこにはこうあった。

ボクノヤミノナカニワ

ムカシミタヨナアシタ

キミハイウ

アナタノシガアタシノキボウナノ

ダカラシンデホシイカ

ボクハソウキイテ

ミライヲステタ

ボクハタダキミト、イツシヨニハ

「クライモリノナカヘイキタクナカッタ」

十を繰り返し、繰り返し、八つ

「玲、こりや暗号だ」

「見れば分かります」

差し出された暗号らしきもの。男の話では、娘の部屋の残されていたそうだ。それも一緒に解けという。それからはどうあっても、「密室の謎を解いて欲しい」の一点張り。話是要領を得ず、唯一はつきりしてそうなのは娘が消えたことぐらい。厄介というか、理不尽というか、それもこれも、ここの家主であり、古書と刀剣を扱う店『美田倉』の店主でもある美田倉安里ミタクラアサトの所為だ。それは間違いない。

毎日毎日暇だ暇だと駄々をこね、店のことなど玲の押し付け、自分は古書店を巡り、近所のおじん、おばん達とお茶を啜る生活。さらなる暇つぶしとして、店の前に「怪事件をさくつと『快決』。ミステリックなお話は美田倉まで」という木札を吊るす始末。それによって月に四、五件は怪（？）事件が舞い込んで来るようになったという。説明終わり。

□□□□□□

「ただでさえ、ただでさえ大掃除で忙しい……忙しいのに貴方は自分の暇つぶしでボくらに厄介を掛けて挙句に片づけまで増やしやがってどういうつもりですか!？」

後半にかけて跳ね上がるオクターブ。精一杯の怒りを声量で表しながら、店主を両手で吊るし上げる。

「ギ、ギブ……ほ、本当に首、首が絞まってる」

「何勝手に顔面青くしてんですか？ 貴方、貴方のおかげでボク達は迷惑してんですよ！ 分かりますか!？」

「ぜ、ぜきにんどります」

「責任?」

締めていた両手を離す。「ぐべ」と店主は床に落ちて、盛大にむせて、それから深呼吸。「ぜひっ、ぜひっ、ぜひっ……玲、君は、

暴力的だな。いつか君は地獄に落ちると良、」

「――この三つ胴。よく切れると良いですねえ。試してみます？」

ボクは書庫の中に置かれていた刀の鯉口を切った。陽光に煌く磨かれた白刃。安里、尻餅をついたまま壁際まで後ずさり。高速度で首を横に振り、彼はボクの提案に必死の拒否を示した。

三つ胴とは日本刀の試し切りにおいて、重ねた罪人の死体の胴を三人分まで切れたことから評定された目安である。ので、ある程度よく切れることだろう

「ぞ、斬殺だけは、」

「じゃあ早く虫干し！ 整理！ 一時間で終わらせて、さっさと行きますよ」

「いち――いや、何も言いません。ハイ、片付けます」

大掃除が終わったのは結局のところ、時計の短針と長針がまっすぐ天井を指して重なった時だった。というよりも、何故ボク達は一月の三日に大掃除をしているのだろうと思考して、一秒半でその思考をやめた。

依頼のため、遊佐家の屋敷に着いたのは大掃除が終わって三時間後。午後三時を回ってからだった。

第一章・電光雪花・起・二

街がざわめいていた。京都にも大阪にも、岡山にも国鉄ですぐの距離にある街、湯乃花市。そのざわめきの中心は殺人事件。獣に食われるというのは事件と言うべきか事故と言うべきか、どちらでも良いけれど、人が食われている。今までで五人。

去年九月から今年の一月の間で、一ヶ月に一人のペース。しかも決まって各月の一日。

決まって被害者はばらばらに引きちぎられた後、皮と髪の毛以外の肉と内臓を食い荒らされて発見される。警察と地元猟師により、徹底的な山狩りが行われたが、成果は上がらず。そもそも、この湯乃花市には獣が少ない。居ても狸か狐、野良猫か野良犬だろう。噂では動物園の猛獣脱走説が囁かれているが、まったく目撃情報が無いのが不可思議だった。

「物騒ですね」

真白が広げている新聞を覗き見ながら、ボクは呟く。

山に面した住宅街の途中、ボクは安里、湯葉、真白と共に歩きながら目的地である遊佐家を目指していた。何処から仕入れた情報か、旧家である遊佐家は江戸期に急激な発展を遂げ、一代で巨万の富を築いたらしい。古くから古神道にも手を出しており、その裏に暗い噂も飛び交っているという。安里からの情報だ。

湯野花市の西北、山脈の傍のさらに奥。山の手前3ヘクタールほどの平地と、山を三つばかり所有しているらしい。どれほど土地が有り余っているんだ、その家は。

真白は新聞を畳み、大型のナップザックにそれを仕舞った。本来なら真白ほどのカバンは要らない。要らないのだが、しばらくの間泊り込んで調べると言うのが彼らの言い分。金払ってやるんだからそれぐらいしろ、とのこと。

だから安里は甚平に身長大ほどの風呂敷。湯葉はノルディック柄

のストールを上着代わりに羽織り、下は灰色のデニム。そしてボストンバッグを持参している。

「そういえば、レイは荷物要らないのか？」

「んん、そうですね……ある程度の物は袂に。後は刀があれば他には要りません」

「いや、そんな物騒なことをにこやかに言われても」と真白は顔をしかめた。

本人が言うとおりに、ボクは手ぶらだ。腰に二刀の小太刀がある以外は、普段の着流し。まあ、そんなに必要は無いと思う。

「着いたよ」

湯葉がそう言う。どうやら私物に関して思考を巡らせている内に着いてしまった様だ。

扉だけで三メートル四方はありそうな門。扉の素材は原色の赤で塗りたくられ、それを形作る金具はどろっとした黒に染められている。ここは東大か。

手近にあったインターフォンらしきもののスイッチを押し込み、数秒。

『はい』

「美田倉の者です。遊佐浩一郎氏に呼ばれて参りました」

おそらく使用人らしき人物に確認を取るように伝えると、「しばらくお待ちください」と五分ほど。確認が取れたようで、赤い門は重苦しい音を立てながら開き始めた。



で、だ。何故ボクはここにいるんだろう？

四方八方を真っ白な壁で覆われた部屋で一人、ボクは床の血痕やらドアの具合などを見ていた。

ここは遊佐浩一郎に連れられてやってきた、件の密室現場なのだが、ボクだけが真面目に調査に乗り出しているという状況である。

「安里と真白は何処行きやりました？　湯葉は……まあ、いいとして。ボクに全部やれと？」

自然と独り言は多くなる。それでも、調査する手を休めないあたり、自分は生真面目と言えるのかもしれない。

一通り見て回ったが、部屋は完全なる立方体を示しており、天井、床、壁にいたるまで全て白色で統一されている。入り口である鋼鉄製の扉を開けると、真正面に小さな窓があり、大きさは二十五センチ四方。三メートルほどの高さにその窓はあり、しっかり鉄格子で封鎖されている。成人男性でもそこから出入りするのは無理だ。それこそ、霧や蝙蝠になれる吸血鬼でもない。

扉の錠前は外からしか鍵がかけられないタイプのシリンダー錠。それと、掌サイズの南京錠が三つ。どれもこれも最近つけられたものらしく、嚴重に扉を守護している。ここまで過剰な錠前で娘を縛る理由が分からなかったが、正直興味が湧かない。

部屋の調度品はベッドとタンス、それと簡素な机と椅子。それ以外は何も無い。物の一つすら。聞いていた、二十歳の娘の部屋とは思えなかった。

その他にも気になる点がある。まず壁は厚みが五十センチほどあるらしく、コンクリートに鉄骨を入れたかなり丈夫な素材。床までそれなのだから、念の入れようがおいしい。そして、ベッドはマットとシーツ以外は鉄製で出来ているらしく、押しても引いてもびくともしないほどの重量。その周りに置かれている大小のベルト。

これではまるで囚人……いや、囚人より過酷な環境じゃないですか。

ボクはこの部屋の住人の唯一の私物、血で元の色が塗りつぶされている着物を観察する。

よくよく見てみると、左首の辺りが特に血で染まっており、左半身にかけて血が流れ落ちているように見える。この出血量だと、動脈を切断した可能性もある。娘の安否が心配されるが、すでにこの出血では致死量だ。探すだけ無駄だとは思うが。

勢いをつけて立ち上がり、着物から眼を逸らした。肩に手をやり、コリを解そうとするが、無理な体勢でいたため中々痛みが取れない。

「この辺？」

「ああ、そうそう。うん、気持ちいいです？」

誰かがボクの肩を優しく揉み解した。その絶妙な手つきに意識が飛びかけたのだが、我に返り、背後を見る。そして、その人物と眼が合う。

栗色の瞳が、「何？」と問いかけてくる。一時思考停止。一、二、三、起動。

「っのわ！」

「はい」

「——はい、じゃないです！ 湯葉、何処行っただんですか!？」
そこには手をひらひらと振って湯葉が立っていた。ドアを開けっ放しにしていたとはいえ、足音どころか、気配すらしなかった。

「わたしが犯人なら、玲は第一の被害者だったね。まだまだ修行が足りない」

「まったくだ」

「って、真白まで……」

気がつけば真白まで部屋にいて、ベッドの側面をじっくり観察していたりする。

ボクは肩をすくめ、やれやれと首を振った。修行が足らんで悪うございましたね。

ため息一つ。部屋の奥に視線を移し、話題を強引に変える。

「あらかた見て回りましたけど、何もない。それ以前に密室だったのかすら分かりません」

「へえ、それはおかしいね」

「まあ、確かに」

言っている間に真白は壁へと歩いていき、壁のにおいを嗅ぐように鼻をよせていた。

「どうしました？」

「臭いがする。血の」

「血？ 確かに着物についてた血の臭いはしますけど、」

「違う。それとは別の血の臭い。しかも、この壁から」

真白の指差す先には真っ白で何も無い壁。ボクはため息をついてこめかみを押さえた。

「気は確かですか？」

「正常だ。お前の頭よりは」

「まし——って、何やってんです!？」

怒鳴り散らそうと思って息を吸うが、真白は気にせず壁を爪ではがそうとしていた。何も無いと決め付けていたボクは、その馬鹿な行動をとめようと真白に手を伸ばすが、その手を止めることになる。

「ほら、やっぱり他の血の臭い」

「これは、」

壁紙を剥がした先には、等間隔に並んだ四本の赤の線が、幾重にも重なった光景。それは血で塗りたくられた指の跡に間違いなかった。

ここに娘を閉じ込めて、それから何をしていたというのだろう。だが、そんなことはどうでもよさそうに真白は壁紙を元に戻す。

「良いんですか」

「勝手に剥がしたことは咎められんだろう」

「いや、そうじゃなくて、血の、指の跡ですよ。正常じゃないです」

「そうなのか？」

「そうですよ!」

「と、言っても、どうにもならんがな」

「はあ？」

疑問をぶつけようにも、すぐさま真白は他の壁へと歩いていってしまい、煮え切らないままボクは頭痛を堪えた。今すぐ真白を開きにしたろうか、と腰の小太刀の柄に手をかける。が、ふと思い出してその手に戻す。

「そうだ、ドアノブの指紋はまだ取ってませんでした」

指紋検出、特にドア周辺を行っていないことに気づいてドアに走るが、「ああ、私が取っておいた。ついでに照合もしてある」と頼もしい真白の言葉。

「早いですね」

「ああ。それなんだがな、ドアノブに残っていたのは、遊佐浩一郎氏の中指の指紋、使用人三人の人差し指の指紋、消えた遊佐涼の人差し指の指紋、それと遊佐涼の姉である遊佐鈴ユサスズの薬指の指紋だけみたいだ」

そう言って真白は、警察が使う指紋検出キット（安里の私物）で検出した指紋を纏めたものを手渡ししてくる。

受け取って見るが、外部の侵入者は無し。家の人間以外が入った要素は無いようだ。

「レイ、少し変なんだがな」

「ん、何です？」

「指紋を取ろうとノブにキットを使っただが、ノブの上部だけ指紋が出ない。こう、何かで拭いたかのように」

「むう……」

何ゆえそんなややこしいことをしたのだろう。証拠を隠滅したいなら全て拭えば良いのに。ボクは顎に手を当て、ドアノブをじっくり観察する。別段おかしい所はないのだが。

「それと、遊佐浩一郎氏が私達に依頼を持ってきた時間も気になる」

「消えてから依頼まで、ほとんどタイムラグがないことですね」

「そう、私から浩一郎氏に聞いてみたんだが、警察では取り合ってくれなかったから、というのが彼の言い分らしい」

「きな臭いですね」

「ああ」

「じゃあ、この家ごとブツ飛ばして解決！」

「「駄目」」

物騒な湯葉の横槍に、真白とボクはそろって首を振る。彼女が言

うと冗談に聞こえない。何せ、彼女にはソレが可能だから。だが、湯葉は盛大にぶっ壊したらしく、頬を膨らませてむくれていた。

「まあ、湯葉の言うとおりブツ飛ばすのも手だが、ここは静観した方が良い。何かこう、ずっと見られている気がする」

真白は首の辺りをさすりながら、眉をひそめた。

首の辺りをさする真白を見て、湯葉はきよろきよろと辺りをうかがい始める。その動きが妙に洗練されていたから、挙動不審な動きを通り越して、もはやボクサーの回避動作に見えた。

「湯葉、そんなに探したって見つかりませんよ。第一、居るかも分からないのに」

「それもそうだね、真白の感覚は当てにならないし」

「おい」

「まあ、一先ず切り上げますか。一通り見終わりましたし」

「そだね、そろそろ夕飯だって。うへへ、どんな料理か楽しみだな」

「……もういい」

真白が根を上げたのを合図にして、ボクと湯葉は娘の部屋から出た。

そしてその間、この事件を引き込んだ張本人の安里は、優雅に客室で本を読みふけていた。もちろんこの後、安里は湯葉によるフライングボディプレスとボクのエルボードロップ、真白のコブラツイストによって布団へと沈められるのだった。

第一章・電光雪花・起・三（前書き）

一から三話まで改訂。やはり人称が合わない様子。

第一章・電光雪花・起・三

風呂を頂いた後、ボクは離れの縁側で夜闇を何とはなしに見ていた。

どうやって娘はあそこから消えたのか、遊佐浩一郎は何故娘をあんな部屋に閉じ込めたのか、難しい問題だなと。

それに、責任者の安里は使い物にならないし、湯葉はこのもてなしを堪能しすぎだ。真白が張り詰めているのも気がかりだ。

「あら」

『ぞわ』、そんな表現が正しいかもしれない。その声を聴いた瞬間、ボクの背筋に冷たいものが走ったのだから。素肌を冷たい手で撫でられた様な、そんな感覚。

見ないほうがいいと言う本能を押さえつけ、理性だけでその声の主の方を見た。

そこには死に装束と見間違ふほど真っ白な小袖を纏い、純粋な黒色だけを詰め込んだ長髪が病的に着物の上を這っている。そして、その持ち主の表情は微かな笑み。

「隣、いいかしら？」

「え……ええ、どうぞ」

どろり、と白檀の香り。普段なら良い香りだと感じるそれも、扱う人間によってこんなにも違いが出るのか。そう思わせるほど不快な臭気。

顔には出さなかったが、正直部屋に戻りたくなっていた。

「ええと、遊佐鈴さんですね？」

「貴方はお姫様を守る騎士さん？」

「は？」

「だって、あの真っ白な髪、綺麗な殿方にずっと寄り添っているもの。まるで騎士みたいよ？」

「いえ、そんな……」

真っ白な髪、きっと真白のことだろう。いつ、自分と真白が居る時を見たのか知らないが、それは誤解だ。ボクは真白を守るために居るわけではない。むしろ、逆だ。

だが、女は見透かすように艶やかに笑む。いや、顔を歪めていると表現した方がいいかもしれない。その女の笑みは狂的だ。

「……妹さん、何かトラブルに巻き込まれてたりしていませんか？ たか？」

遊佐鈴で間違いないと思うが、どうも会話のペースがつかめない。幾分か強引だが、話の筋を事件の方へと持っていく。

だが、彼女は眼を少し開き気味に、「妹？」と小首をかしげた。

「私に妹は居ないわ」

「え、いや、そんなはずは、」

「本当に、涼は何処へ行ったのかしら。またあの子の作るお味噌汁が食べたいわ」

「涼さんが消えた理由は分かりますか？」

「？ 弟は消えてなんかないわ」

会話が噛み合わない。

「あの子はよくフラフラ出歩くのよ。偏食だし、うるさいし」

「はあ……」

文句を言っているはずなのに、楽しそうに遊佐鈴は笑う。笑み、そうだ笑みだ。彼女は同じ笑みをずっと顔に貼り付けている。まったく変わることの無い表情。よく仮面のような、と形容したりするが、この女性に關しては仮面の方が表情豊かかもしれない。

「貴方も綺麗な顔ね。あの真っ白な殿方とは違うけれど、すごく滑らかで、柔らかそう……」

蛆のように白い手が、ざわざわとボクの頬を撫でる。さっき声をかけられたときよりも酷い嫌悪感。思わず嘔吐しそうになるのを堪える。

「あなた、危うくて、棘があって、まるでガラスの薔薇ね。いいわ……ねえ、ここの家に来ない？」

耳元に遊佐鈴の唇の感触。間近でかけられる吐息に、ボクの中の何か警報を鳴らしている。近寄ってはいけない、と。

「ああゝすみません。遅くにありがとうございます。もうボクはここで失礼しますよ」

その場の空気に耐え切れなくなって、慌てて立ち上がる。そのまま縁側を後にしようとした。だが、袖を掴む何か。ぞわっと、またえもいえぬ感覚。

「貴方、おいしそうね」

後で舌なめずりするような音。振り向きたくない。そこにいるのは、果たして人なのか。それとも、

「ボクなんか食べてもおいしくないですよ」

引き剥がすように彼女の手を振り払う。

「あら、残念」

からからと笑う声。もうそんな彼女に付き合わないよう、ボクは振り向くことなく部屋へ早足で進んだ。

それでも、女の笑い声が耳から離れそうに無かった。

第一章・電光雪花・起・四

「どうした真白、酷い顔だ」

「ほっとしてくれ」

真白が部屋に戻るなり、安里は布団に寝転んだままそう皮肉る。
真白は足音大きく、自分の布団の所へ行くなり、どかっと座り込んだ。ずっと誰かに見られているような、ねっとりとした視線を感じていた。そのためか、若干の気だるさを真白は感じていた。

しかも、その気配がまったく動かず、真白は動きあぐねていた。

「静かにしろ、隣で湯葉が寝ている」

「黙れこのシスコン」

真白はごろんと仰向けになると、額に手の甲を置いてため息をついた。この妹至上主義者に何を言っても糠に釘、暖簾に腕押し、虎穴に入らずんば虎子を得ず……最後は違ったか、と目を閉じる。

「そうだ、言っておきたいことを忘れるところだったよ」

「あ？」

安里は本を畳むと、布団の上に胡坐をかいて真白の方を向いた。

「真白、これは鬼が絡んでいる」

「……お前は、そう思うのか？」

鬼。部屋の嚴重さ加減。壁の血の跡。消えた娘。真白がずっと感じていた視線。心当たりが無いわけではないが、半信半疑という顔。「間違いないと思うがね。拘束具のようなベッド、コンクリートで塗り固められた壁、それとドアだ。扉自体は真新しいのに、蝶番には錆びが浮いていた。扉を何回も変えたんだろうな。おそらく、あの部屋で鬼を飼っていた」

鬼を飼う、という言葉に真白は顔をしかめるが、状況からしてその可能性は高かった。ならその娘というのは鬼なのか？ それでも、真白の感覚はそれを半分ほど否定している。

「鬼は絡んでいると思う。が、何かが違う。湯水の中で足搔いてい

るように、頭がぼうつとするんだ。何か、違う気がする」

「ふん、成程。お前さんの第六感も役に立たんようだな」

「そうだな、最近になってから鈍い」

安里は、皮肉に噛み付いてこない真白を不思議そうに見るも、視線を本に戻した。

真白は安里の目線に気づきつつも、気づかないフリをして眼を掌で覆った。

「お前さんがあの娘にどんな思い入れをしているか知らんよ。でもな、彼女がお前さんと共に居ても、良い結果にはならない。例えば、結った関係でもだ」

「……………」

「都合が悪くなると無言になる、お前さんの悪い癖だ」

真白は何かを言おうとして口を開くが、声になる前に口を閉じた。言葉を噛み殺すように、唇を噛み締めながら。

「玲はまだ十六だ。あのまま人として生きるべきだろう。さもないと彼女は鬼になる。復讐を纏った最悪の鬼にね」

「安里、うるさい」

「お前さんは『玲を守ること』を盟約の内容にしたんだろう？ 守る、という行為は物理的脅威を取り除くだけじゃない。支えるだけでも守るということに――」

「お前も人のことが言えるのか？ 死霊使い」

シン、と二人の間が凍る。外の雑音さえも、真白の一声で止まったかのように、静かに。

「すまん」

「ああ、こっちな」

真白は安里に背を向け、安里はページを捲り、同時に二人は動き出した。

二人が互いに交わした言葉は、互いに禁句。それが分かっているも、二人は言い合わずにいらなかった。自分の過ちを、ただ指摘して欲しいがために。

「俺も趣味が良いとは言わんよ。ただな、アレだけは譲れない」

「私もだ……けれど、」

「何だ？」

「私はお前と違う。その事実を変えようが無い」

「つまり、玲を人として生かす自信が無い」

「ああ」

「足りない自分には、人とは何たるかということを教えられない」

「……ああ」

「はっ」

真白を鼻で笑うと、安里は本を閉じる。そのまま電灯を消すと、布団にもぐりこんでしまった。

「俺もお前さんも、人間性なんて持ち合わせていないさ。ただな、それが分かっているだけで十分だろうよ。持っているものより、持っていないものの方が理解は容易い。持たざる者は、持たないが故に、他の者へ道を示せるものだ」

「よく、解らない」

「今は良いさ。まだ時間はあるだろう？」

「さあね」

暗闇の中、真白と安里は背中合わせのまま、同時に眼を閉じる。

ただ闇に身を任せるまま、二人は曖昧な結論のまま言葉を交わすことを止めた。

それが彼らの会話における規定事項であるかのように、それ以降言葉は生まれなかった。

第一章・電光雪花・承・一

止まる、進む、止まる、進む、止まる、進む。

二重の時の中で、時計の短針と長針は寄り添いながら動く。

ボクは夕暮れのオレンジの中に立っている。何処にでもあるような、校舎の教室中で。

声が、聞こえる。けど聞きとれない声で、ボクの知っているはずの少女はボクに語りかけている。

夕暮れと影で、少女の顔を見れない。見ることは叶わず。でも気にせず、その少女の横を素通りする。

教室のドアに手をかけ、音も立てずに教室を出た。

右を向けば延々と続く廊下。きゅっきゅと廊下を踏みしめ進む。

先は見えているはずなのに、端にたどり着かない。まるで、while (0) の無限ループ。そのループの中で、ボクはただ緩やかに、境界の曖昧な空間を進む。

どれぐらい歩いたのだろう。果てない廊下を長い時間歩いたはずだ。けれど、疲労する感情などとうに無い。歩くことが苦痛だと感じることもさえ忘れた。その空間すらもう飽きるほど見ている。何度も見るこの世界の中、ソレはいつもいる。

「貴方が思っているほど、世界は小さくないのだよ。我が主」

長く続く廊下に、ソレは突然現れる。真白によく似た顔立ち。真白と同じ白い髪、切れ長な山吹色の瞳、服の領域と世界の境がボケて見えるほどの純白のローブに身を包んだ、少年。真白と違うのは年齢と、その表情が無邪気な子どものモノであることだろう。

この世界において、ボクを主と呼ぶ存在。彼のことをボクは知らない。

「自分が重要な要素だと気づくのはいつだろうね、貴方は」

少年は余っているローブの裾をパタパタと振りながら、ボクの目の前をくるくる。

「重要な要素？」

動き回る少年から目を離さないよう、ボクは少年を目で追う。

「あれ、まだ思い出さないのかな？ 貴方は鍵なんだよ。人と、人で無い者がある場所へと導くためのね」

「鍵？ ある場所ってなんですか？」

瞬間、少年はボクの視界から消える。何も無い廊下だけが、そこに残った。

シン、と静けさだけがそこに居る。

「鍵は鍵さ。貴方は思い出さなきゃならない。役割と、居るべき場所を」

背後、背後に少年は立っていた。見る間でもなく声。ボクは振り向きながら後ずさる。

「ああ……そろそろ時間だね。邪魔者が来た様だ。じゃあまたね、我が主」

「待って！ まだ聞きたいことが――」

パチン、少年は指を鳴らす。

途端、廊下の消失。足下の崩壊。落下。逆さになった世界は暗黒。それでもボクは見ている。自分を見下ろす少年の姿を。

「どんな時でも僕は貴方を見ているよ、我が主。また、会いに来るからね」

小さくなる少年の声を聞きながら、下へ下へ自由落下する玲の体。そして見る。暗い世界の中で、灰色になった人間の影を、ちらちらとゆれる影達を。

彼らは居る。在る。有る。あったはずのこの場所に彼らは居る。ボクもかつて居た場所に、灰色の人間の影は円になる。ボクを拒む。ボクは、ただその影が足下へと落ちていくのを見ながら、また堕ちる。

上を見る。けれど下。落下点に、紫色をした渦の中心点。

そのシュバルツシルト半径に囚われ、特異点に引き寄せられているのはボクだ。

ウボ・サスラに身を預けたのは紛れもなく自分の意思。

――××ら。

砕かれたその魂は、虚数へ帰る。もう一度戻りたい。

『戻りたい？』

実数ではなく、 i へとその身を還せ。

『どうして？』

――×きら！

伸びる渦の手に、身体を縛られる感覚にただ歓喜。

『歓喜？』

磨り潰され、崩れ、腐り、鎖のように巻かれたその肉体を解放すること。

『解放なんかしたくない！』

ただ、単純に終わりを望む。

『終わりなど、望んでなんか――』

「玲！」

声。それは実数の声。実数世界における声と呼べる音声情報。名前というラベル。

「――っ、う」

痛む。こめかみから眼球の奥にかけて、ずっしりと何かを詰め込まれたような、圧迫を伴う痛み。重い上半身を無理矢理布団から引き剥がす。

「うなされていた。またか？」

「……また、とは？」

「惚けるな。ここ何ヶ月かずっとだろう」

久しく見た、真白の怒る顔。黒の中に浮かぶ曖昧な白い髪。つり上がった形のよい眉を目線でなぞりながら、何故彼が怒っているのか合点がいかず、しばらくしてそれを理解する。

「ごめんなさい」

うまく声が出ない。真白のため息。彼の顔。寂しそうにボクの頬に触れる。そこから分け与えられた存在が、ボクの在処を固定する。硬直した喉が、緩やかに弛緩していく。唾液で濡らした声帯はやっと、役割を思い出した。

「……ボクを起こした理由は？」

虚を突かれたように、真白は首を傾げる。

「うなされていただけでボクを起こさないでしょう」

「ああ、着いて来て欲しい場所がある」

「トイレですか？」

「怒るぞ」

「オウケイ、何か見つけたんですね？」

「ああ」



「まさか、書庫とは」

真白に手を引かれるまま着いた場所は、遊佐家の母屋にある書庫。全ての照明を落とされた屋敷の中は暗く、伸ばした手の先すら見えない。だが、真白には関係ないようだ。危なげなく闇夜を進んでいた。

「侵入は得意だ」

真白は得意げな笑い声をこぼすと、戸の手前で指をスナップする。

『clock』

カタン、と錠前が震え、ごとりと音を立てて床に転がり落ちる。

魔術ではない、鬼にのみ許される音片。オトカタ

「吸血鬼って、家の者に招かれない限り、その家に侵入できないのでは？」

「もう招かれてるだろ」

「なるほど」

さっさとドアを潜っていった真白に続き、書庫の中に入り込んだ。月明かりが若干差し込むだけで、廊下よりさらに暗い。

ボクは手元でぱきっと、ある物をへし折ると、ライムグリーン色の光があたりを包み始めた。

その光に気づいた真白は、眩しそうに顔を手で覆う。

「こんなこともあるうかと、袂に入れておきました」

したり顔でボクが手に持っていたのは、化学反応で発光するステイック状の携行ライト。さっきの何かを折ったのはそれだった。

「お前は某猫型ロボットか」

「お褒めに預かり光栄です」

「褒めてない」

「流石に、どこでも入れるドアは持ってないですけどね」

「持ってたらCIAとか、MI6からオファーが来るな」

「着いて来い、ボンドガール」

「ボンドガール違う」

「ノリが悪いですね、真白は」

「……………」

かび臭い臭いが立ち込める中、闇の中を蛍光色が照らし出していた。月明かりとライト、二つだけではやはり暗く、逆に不気味さを煽っていた。

「真白、ここから探しましょう」

ボクが指差したのは一際埃を被っていない書棚。縦横二メートル

はある書棚のうち、入り口から四番目にあったそれは、よく手入れがされていた。

一冊抜き出して開くが、文字が古すぎて読めない。古典を読み解く知識をボクは持ち合わせていない。

「貸せ」

「読めるんですか？」

「まあな。伊達に長生きしてない」

「あっそ」

真白は意外にどうでも良いことをよく知っている。だが、彼のこともそうだが、ボクは知っていることの方が少なかった。ボクは真白と出会ってから六年間の記憶以外を持っていない。記憶喪失、というものらしいのだが、自分の名前と、常識外の知識、桜と刀と血のイメージ以外覚えていなかった。

真白と会った時は十歳ほどの年齢で、凍りついたままの幼い容貌を鏡の中に見つけたことを覚えている。今こそ笑うことが出来るが、ボクの奥底には抑えようの無い憎悪が未だ存在している。

人を外れたものに対する、殺意すら覚えるほどの憎悪が。

「レイ？」

暗闇の中、間近に真白の顔があった。ボクの瞳を覗きこめるほどの距離で。

至近距離で照らし出された、ほの白い真白の顔。染みも傷も無い、艶やかな肌。闇の中でもはっきりと視認出来る髪。そして、満月のように、淡く、瞳が輝いている。

どくん、とボクの中の何かが蠢く。

「あ……」

「ぼうつとして、どうした？」

「いえ……それより読めました？ それ」

誤魔化すように古文書を指差す。動揺を悟られていないか、内心冷や冷やした。

玲は気にすることなく、ぺらぺらと古文書を捲りながら口を開く。

ただ、古文書を見る目つきが鋭いことが気になったが。

「内容は遊佐家の過去の記録だ。それも鬼に関するモノの」

「鬼、ですか」

触れてはいけない。知ってはいけない。それが鬼。ボクの中の誰かの教え。

「遊佐家は代々食屍鬼と関係があったそうだ。公式文書では遊佐家は紡績業で成り上がったらしいんだが、どうやらその成功の裏では食屍鬼の影がある」

「他は？」

「家系図だな」

ボクが手渡した少し新しめの本。そこには代々の遊佐家の家系が載っていた。

遊佐浩一郎氏から十二代上までは遡れなかったが、そこまでは全て婿養子で家系が成り立っていた。一代に男子と女子が一人ずつ生まれ、そして男子が全て若くして亡くなっている。それが十二代続いていた。少し奇妙ではある。

「遊佐浩一郎氏も婿養子の方ですね」

「確かに。でも、何故この代だけは女子が二人なんだ？ この家系図で行けば、男子と女子が一人ずつのはずなんだが。ただの偶然か？」

「……血は、偶然じゃないですよ。血は呪いです。いつまでも続く、呪い」

「レイ」

「——って、何言ってるでしょうね。変だなあ」

乾いた笑いと、引きつっているだろう笑顔、時々見せる記憶の残留。

真白はあえて気にしないようにページを捲っていた。こういう時、彼は突っ込んで聞いてこない。気を使っているのか、ただ単に興味が無いだけか。後者かもしれないと思い、少々へこむ。

「後は、分からないな。他の古文書もざっくり読んでみたが、内容

は似たり寄ったり。遊佐家と食屍鬼が関係していた、ぐらいか」

「そうですか」

真白は元あった場所に古文書を戻すと、その書棚を見上げたまま微動だにしなかった。

蛍光の緑色と、月明かりの中で佇む彼は、そのまま二つの光の中に溶けてしまいそうなほど存在が希薄。

「レイ」「真白」

ざわつくような不安に押されて。声を出したのは同時。

「言えよ」

「はい」

主導権は自分に。不安は大きく。

「真白はどう思います？ 鬼のこと、鬼が人を食うこと、鬼が人の血を吸うこと、鬼が人を殺すことを」

「どう、と言われてもな」

「ボクはどれも同じと捉えるんです。どれも結局は人を殺すこと。でも、彼らはそれを行わなければ生きていけない。では、元が人間である鬼の存在意義とは何か？」

「らしくないな。六年前のお前なら、鬼の存在意義なんて考えもしなかっただろうに」

ボクは俯き、「確かに」と自嘲気味に笑う。

「ボクの中には鬼を殺したいという欲求があります。訳の分からない殺害欲。ボクはただ、憎いまま鬼を殺していればいいと思っています。けどそれが揺らいでいます」

「私を解体した人間の言葉とは思えない」

「それ、なんです」

「ん」

「自分でもおかしいと分かっています。でも、全ては貴方と、真白と会ってから狂い始めた。自分の憎悪に正直なまま、ただひたすらに鬼を殺していればどんなに楽だったんだろう、と。けれど、貴方と結ってから鬼の定義が変わってしまった。鬼であるはずの貴方の

傍が心地良いと感じ始めている。ボクは、貴方も殺したいはずなのに」

真白はどう思うだろう。こんなボクを。最初に出会って、一方的な殺戮。それを彼は抵抗もせず、それでも自分を受け止めてくれた。鬼を殺すために、自分と盟約まで結んで。鬼にとって、人と結うことが禁忌であるとしても。

けれど、ボクは彼に何も出来ない。どんなに近づこうとも、カテゴリで言えばボクは人、真白は鬼。本来なら相容れぬ二者。そして、自分の殺意は鬼というカテゴリーに向いている。

自分の中の殺意のベクトルと真白と居たいというベクトルが混じり合って、取り返しのつかないことになるのではないかと思い、付かず離れず。

「聞いて良いですか？」

「ああ」

二度三度頷く。聞きたいことはたった一つ。

「貴方は何故、吸血鬼になったのですか？」

答え、答えてくれない。答えてくれるはずが無い。それでも、彼の起源、それを知りたい欲求には勝てなかった。

じっと睨み付けるボクの視線を受け止めながら、真白はうわ言のように呟く。

「許せなかったから」

ボクを見据え、真白表情を変えることなく言った。答えではない、ただの吐露にも聞こえる、曖昧な言葉。けれど、ボクにはそれで十分だった。

「何を？」

冷たく、感情を押し殺した声。

「人を」

諦め、疲れたような声。

同時にため息。そこだけ闇が濃く、深く。

「それならば」

「ああ」

「ボクらは」「私達は」

「相容れませんか」「相容れないな」

無常に、非常に、ボクらは同時に目を逸らし、それから合うことは無かった。

第一章・電光雪花・承・二（前書き）

連日投稿してたのに寝たきりでダウン……
やっとな載せられるまでに……
こんなんで一月中に第一章載せられるのか？
というわけでもりそばでした

第一章・電光雪花・承・二

騒がしい。騒がしい音がボクを覚醒させた。

布団から上肢を起こし、薄っすらと朝日が入り込む障子をぼうつと見ていると、黒い人影がイッタリキタリ。

隣。寝ているはずの湯葉はいない。

訝しげに思ったボクは、起き出して隣の部屋を開けるも、真白と安里の姿も無い。

――人が。

――食べ××。

――客人。

――どうして。

混乱、使用人の混乱が波及している。

その中心を見るべく障子に手をかけるが、その前に障子は開いた。感情を完全に消し去って立つ真白。彼は抑揚無くボクに告げた。

「湯葉が食われた」



前を歩く玲は、一片の動揺も見せてはいない。ただ背中に違和感のある沈黙を乗せて。

屋敷の庭園の先。山を臨むその先で、赤。

玲が止まった先で、安里はその赤の前で座り込んでいた。ただ、座り込んでぼうつと眺めているようにも見える。やはり彼からも違和感。

周りを囲むように遊佐浩一郎氏と遊佐家の使用人が並んでいる。

一様に赤い何かを、何かを見ないように顔を背けている。

肉の塊にも見えるソレに、けれど虚ろに天上を見上げる顔は、紛れも無く湯葉。全身を何かが這っていく感触。

それが湯葉？ 湯葉は赤かった？ ちょっと待て、人間はそんなに紅くない。それに食われたって、そんなはずは。だって昨日はおやすみって言って――いや、昨日は真白と書庫にいたんだ。もしかしたらその時？ 何言って、そんなはずは、

「安里、どんな感じだ？」

ありえない。ボクは思わず真白の顔を見てしまう。妹を失った相手にかける言葉がソレなのかと。

「ああ、問題ない」

淡泊な安里の声。湯葉が死んだことで、耳が正常に機能しなくなったのかと思った。けれどそれは実際の声で。安里は間違いなくそう言ったのだ。

違和感、そう違和感だ。真白と安里から悲哀も動揺も憤怒も憎悪も、一片の感情すら読み取ることが出来ない。二人は湯葉の死にさほど動揺していない。大事な人、近い人が死んだのに、どうしてそんなに冷静なんだ。

「手ひどくやられたな。顔以外残っていないじゃないか」

「まあね、だが核は残ってる。再生は可能だよ」

安里はそでをまくり、湯葉の死体をまさぐっている。赤の中に手を入れ、何かを探るように指を動かす。

「――っう」

ボクはこみ上げる酸味に顔を背けた。けれど、ぐちゅぐちゅと肉を探る水音は消えてなくなる。それが妙に想像をかきたて、吐き気は増す。

それは遊佐家の者達も同じで、口元を押さえたり、目を伏せていたり、青ざめながら見ているものも居た。各々行動は別だが、顔に

は安里と真白への恐れが見て取れる。無理も無い。彼らはこの場でやっていることは異常なのだから。

「うん、どうやら無事のようにだね」

「そうか、それは良かった」

何が――

「何が良かったですか！ 湯葉が、死んだんですよ。真白は、安里は、悲しくないんですか！？」

耐え切れなかった。意味の分からない会話を続け、あまつさえ、良かったなどと口にする二人に。ボクは湯葉を殺したモノに対する怒りより先に、何も感じていない真白と安里への怒りが湧いていた。けれど二人は、ボクを異邦人でも見るような目つきで一瞥すると、安里は声を上げて笑い、真白はそんな安里を哀れむように見た。

「可笑しいことでも言いましたか？ ボクは真面目に怒っているんです」

「いや、そう言えば知らないか」

涙するほど笑った朝とは、目元を拭いながらそう言う。

「知らない？」

「安里、それ位にしとけ」

「おっと、そうだった」

安里は立ち上がり、ぐっと伸びをすると、あくびを噛み殺しながら妹の死体に背を向けてしまった。もう死体に用は無いと言わんばかりに、安里は使用人たちをかき分け、ボクの横を素通りする。

「――あさ、」

安里に詰め寄ろうと一歩踏み出すが、背後から真白に肩を掴まれる。

「真白！ 貴方までどうしたんです！？ 湯葉が、湯葉が、死んだっていうのに……」

搾り出すように声を荒げるが、両目から零れる雫が呼吸を邪魔する。叫びたいのに、次の言葉が紡げない。まだ、吐き出したいことは幾らでもあるのに。

「レイ、今私達がやることは泣く事じゃない」

キツと後ろの真白を睨む。「友人の死に泣いて何が悪い？」そう言おうとした。けれどその言葉は舌先に乗っただけで、音となることはなかった。

ボクを見る真白の目は、底が見えないほど暗い、危うい色を放っていたから。

どくん——また自分の中で何かが蠢く。その、色の冴えた山吹色の瞳が、自分の中の何かをノックしてるかのように。

真白は顔を上げると、湯葉の死体の先、点々と続く血の跡を辿っていた。それは林の先に続き、さらに遠くには小さな山がそびえているのが見える。

そして、またボクと目を合わせた真白は、低く呟いた。

「私達がやることは、私達に干渉してきたモノに、手を出したことを後悔させることだ」

冷たく通る声が、ボクの身体を一度、震わせた。

第一章・電光雪花・承・二（後書き）

ハイ、何かグロいようですが、登場人物が一人ログアウトしました。
ここからの展開が速くなる予定であります。

第一章・電光雪花・承・三（前書き）

Q：休止の前に第一章は全て載せられるのか？

A：可能です

第一章・電光雪花・承・三

まだたつぷりと雪の残る雑木林の中、真白の視線を後に受けながらボクは真つ直ぐ真白が見ていた方向へ歩いていった。ぶるつと身を震わせ、寒風吹き荒ぶ林をきよろきよろ。冬らしく、木々に葉は無く、見るも無残に枯れ木をさらす。空は曇天、寒空は今にも雪を吐き出しそうに暗く、低く。

「この先に何があるんです？」

「視線の主」

そう言いながら真白はボクの肩にコートを掛ける。慌てて振り向くと彼は渋い顔で、「だからもっと荷物を持ってくるべきだったんだ」と言う。

「あたっ」

一度頭を叩かれ、思わずそこに手をやる。だが、寒かったのは事実で、彼の体温で暖められたコートは有り難かった。

「ありがとうございます」

「当然だ」

照れ隠しか、それとも素なのか、ミリ単位も変わらない表情では判断できなかった。まあ、どちらにせよ気遣いは嬉しい。

「それより、安里を残してきてよかったんですか？ 湯葉のこともありますし……」

そうだ、湯葉は死んだのだ。それなのに自分はここでなにをしているのだろうか。本当なら彼女の死を彼女のそばで偲んでやるべきなのではないのか。

「安里なら心配ない。あいつ一人なら身を守れる。湯葉も問題は無いだろう」

「湯葉は問題ないって、問題ありじゃないですか。……ん？ あいつ一人なら身を守れるってどういうことですか？」

立ち止まって真白の方へ振り返るが彼は、「何だそんなこと」と

眩いて、瞬間。

『clock』

真白が指を鳴らす音、ボクの横で何かが弾かれる音は同時。金属に金属をぶつけた様な甲高い音が林に木霊する。

そして気づけばボクは雑木林の上を飛んでいて、真白はボクを抱えたまま指を鳴らす。

『clock clock clock――』

真白が指を鳴らすたび、ボくらにぶつかって来た何かは、『逆流して空に戻っていく雪』に身体を覆われ、身動きが取れなくなっていた。

「レイ、刀を抜け。鬼だ」

「鬼――」

鬼という言葉。迫る地面。着地。するりと真白から降りて鏗鳴り。鉄鞘から抜けるときの摩擦音が、自分の奥底の何かを呼び起こす。目を閉じる。一度『呼吸』、二度『呼吸』、三度『呼吸』、四度『目を開ける』。

眼前に真白の指、その直線状に並ぶように彼の瞳、輝きを増して陽光のようになった彼の眼、自分の奥底から引きずり出される何か。

『clock』

弾かれる真白の指の音だけが、静寂の中を伝わって――



雪に覆われていた何かは爆発させるように雪を排除する。

二、三度顔を震わすと、直線距離で百メートル前方に獲物を見つけた。

雪を取り除いても、そのモノの身体は白。白の小袖に身を纏い、黒の長髪を病的に這わせた女性。それは、遊佐鈴と呼ばれていた者だった。

「みいつけた」

もはや人間だった時の容貌とさえないほど造形の崩れた遊佐鈴。彼女はぎりぎり機械仕掛けのように口角を上げ、互い違いになった目玉で玲を捉える。

「ひゅは！」

もはやそれは吹雪。遊佐鈴の速度は人間の限界値を軽く凌駕していた。その白い疾風は立ち尽くす玲と真白へと迫る。

「起きろ、姫様」

真白の弾指、乾いた音が玲を震わす。

ゆるゆると面を上げた玲。其の瞳に映る色は赤と青。紫で統一されていた双眸は、右手に赤、左手に青を湛え、燐光をその内に宿す。表情は楽。柔らかくなった表情筋が作るはこれから起こる快楽への期待。

玲は両手に握った双刀で、一曲奏でるかのように、右手は切っ先まで真っ直ぐ正面を捉え、左手は右手と垂直な十字を描くように添える。

ぎりり、と柄が軋む。そして、鏢が音を奏でると同時に、構えられた刀が慟哭する。

「ひと、ふた、み、よ、いつ、む、なな、や、ここの、たり——」

無味乾燥な言葉を紡ぐ玲に呼びかけられ、刀は視認出来なくなるほど自身ごと空間を歪ませる。まるで、刀が自分の周りの空間だけ切り取ったかのように、柄の先からは金属ではなく、黒と青渦巻く虚空が姿を現していた。

そして音だ、音の発生源は紛れもなく、刀から産み出されている虚空。

ピアノ線同士を引っかき合わせるような、それだけで切断が可能なほど鋭利な音が、辺りを威嚇する。

プリセット
『固定』

収縮を繰り返していた虚空は、玲の言の葉でその動きを完全に固定される。

異変を感じ取った遊佐鈴は、十メートル手前でその動きを止めた。けれど、それは彼女にとって一瞬の間合い。玲が何をしようとも、勝負を決するのは容易いと遊佐鈴は思考していた。

「うふ、かあわいい。何をしててもむだなのに……やっぱり、たべたいわあ」

知性など無い獣のように伸びた舌が、チロリチロリと遊佐鈴の唇を濡らしていく。唾液で濡れきった口元をさらに笑みに歪め、遊佐鈴は前傾に構えた。

「ねえ」

艶を含んだ声音。だがそれは玲の声。

「ねえ、真白」

玲の問い掛け。真白に対する問い掛け。目の前にいる化け物など意に介していない。それどころか、微かにつまらなそうな表情をして。

「あれ斬り捨てたら、貴方も斬り殺して良いですか？」

「お前も死ぬがな」

真白を振り返る玲の顔は、無邪気そのもの。真白はその変化にうろたえもせず、淡々と受け答えを返した。

「ああ、鬼結。忘れてました。どちらかが死ねばもう片方も死ぬって約束事……ホント、面倒なことしちゃいましたよね」

「前の奴、遊佐鈴だったか。殺らなくていいのか？ 向こうはお前にご執心のようなが」

「じょーだん！ あんなのに身も心も預ける気は無いです。貴方ならいいですけど」

頭の後ろで刀ごと手を組むと、へらっと口元で笑みを形作る。

その表情に真白は心底嫌そうに首を振った。

「私の身も心も斬り刻む気か？」

「わかってんじゃないですか」

真白の眼前に振り下ろす異形の刀。その切っ先を眺めながら、真白はため息をつく。

『clock』

ただ指を鳴らしただけ。だが、玲に飛び掛ろうとしていた遊佐鈴は、『玲の横で急停止させられ、元の場所まで弾き飛ばされる』。

「が、があ!？」

地面に積もった真新しい雪をごっそりと抉りながら、遊佐鈴は林の奥へと転がされていった。

「サンキュ」

「私をあてにするな」

「そうですね、『最弱』の吸血鬼さん」

「……………」

「はは、落ち込みました？」

「来たぞ」

体勢を立て直した遊佐鈴は、地面すれすれを滑空するように、ジグザグに走り抜ける。

けれど、玲は慌てることなく真白の後へと下がった。その間にも遊佐鈴は一秒も立たない間に距離を詰めるが、真白がその間に一步、割って入る。

「げびよ——」

「悪いな、長引かせたくないんだ」

遊佐鈴という質量体が、高速度で突っ込んできたにもかかわらず、真白は片手を突き出しただけでその突撃を止めた。そのまま、ぎりぎりと言を立てながら遊佐鈴の頭部に握力を掛けていった。

「玲」

「りよーかい」

そして、真白はくつと前に遊佐鈴を押し出し、真白の後から飛び出た玲が遊佐鈴と交差する。瞬間、遊佐鈴は押し出されたまま硬直。玲の握る刀の虚空が消え去り、二度三度血ぶるいするように刀を振り回し、鏗鳴りの下に納刀。

「つまらない」

玲が遊佐鈴に背を向けると、遊佐鈴が真っ白な灰になって消え去るのは同時。

粉雪が降るように、遊佐鈴の身体は雪に混じって消えた。一片の欠片すら残すことなく。

「もっと楽しく戦えたら、いい、のに——」

一步、二歩、三歩歩いて玲はその場に倒れこんだ。

それを見届けた真白は、慌てることなく玲へ歩み寄り、何事もなかったように玲を立てせる。

「起きろ、玲」

真白は玲の頬を何度か軽く張り、気を失った玲に活を入れる。

「ヴ、う……あれ？ 終わったんですか？」

「ああ、覚えてるだろ」

「……ええ、今ボクが斬ったのって——」

「間違いなく、遊佐鈴だな」

「それじゃあ、湯葉を殺したのはこの人？」

玲は遊佐鈴の灰があるであろう辺りを見ながら、憎憎しげに顔を歪める。

「どうかな、証拠が無いから判断はできない。ただ、その誰かさんは教えてくれそうだが？」

「えっ？」

真白と玲が振り返る先、そこには小さな小屋が一つ。そして、優しげな笑みを浮かべる青年が一人、作務衣姿で出迎えていた。

彼が体の前で組んでいる手には、両方とも親指が無い。

真白は、「成程ね」と含み笑いを浮かべると、躊躇することなく小屋の方へと歩いてゆく。

玲は真白の「成程ね」の意味が分からなかった。けれど、今はついていくしかないと考えて、慌てて彼の後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1302q/>

天ツ君ノ歌

2011年1月23日03時55分発行